

~~~~~  
タイトル:

『大計なき国家・日本の末路  
—日本とドイツの戦後を分けたもの—』

クライン孝子著            出版社 祥伝社  
~~~~~

目次

- 1章 戦後ドイツの「国家百年の計」  
— ドイツにおける「国家百年の計」とは何か。
- 2章 ドイツ人の捕虜1100万人の運命  
— 悲惨な戦争体験から見る戦争の本質
- 3章 ドイツはなぜ、反論を封印したのか  
— 一般市民1200万の過酷体験からドイツが学んだこと
- 4章 「ニュルンベルグ裁判」と「東京裁判」  
— 裁判の受け止め方に見る日独の大きな差異
- 5章 情報戦略と諜報機関（1）  
— 生き馬の目を抜く情報戦の実態と「ゲーレン機関」
- 6章 情報戦略と諜報機関（2）  
— 世界の中の「情報欠乏国家」と日本の惨憺
- 7章 再軍備と旧軍人の処遇  
— 旧軍人を復興に活用した国、社会から葬った国
- 8章 国家の自立、政治家の責任  
— なぜ日本は目先しか見えず、国益を失うのか
- 9章 国運を左右するメディアの責任  
— なぜドイツは、報道の質に対する要求レベルが高いのか
- 10章 教育は国家百年の大計  
— 戦勝国の支持を聞き流した国、真に受けた国
- 11章 独自の憲法を持つ国・持たぬ国  
— なぜ日本は、国家の芯を抜かれてしまったのか”